

■『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本（Add.1682および1683）写真版』より ■

発刊の辞

池田大作

過ぎ去りし「戦争の世紀」といわれる20世紀の教訓を生かし、新たな世紀は、悲惨と悲劇から解放された「希望の世紀」であってほしい。そういう切望をもって多くの人々が迎えたはずの新たな世紀に、同時多発テロを引き金とする衝撃と不安が広がっている。

世界的な経済同時不況やテロリズム拡大への恐れ、それらの背景をなす経済グローバル化の「負の側面」、さらに極度の貧困、人権抑圧、民族・人種・宗教の対立、紛争から地球環境問題まで、21世紀の抱える課題は複雑に重なり合っている。

怒濤のように押し寄せる経済のグローバル化は、けっして人類全体の幸福につながっているとはいいがたいであろう。世界全体が巨大な一つの「経済競争の場」となることによって、当然のことながら、敗者も地球規模で生まれることとなった。競争に破れるどころか、多くの国々、地域、人々はその競争のスタートラインにもつけない。この危機と不安に臨んで、ナショナリスティックな反応を示す人々もいる。しかし、それでは何の問題解決にもならない。

経済、情報、通信から価値観、生き方にいたるまでのさまざまな次元、領域で進行しているグローバリズムには、もちろん利点もたくさんある。問題は、地域の経済や文化を破壊し、すべてを画一化するという側面が否定できないことであろう。グローバリズムのそのような「負の側面」を解消することが重要な課題となってくるのである。

グローバリズムに伴う「負の側面」を超越するのは、ナショナリズムではなく、「コスモポリタニズム」であろう。「コスモポリタニズム」とは、シカゴ大学のマーサ・ヌスバウム教授がいうように、他者の差異を認めながら愛するこ

とである。それは国境や民族の違いを超え、しかも、他者の文化を破壊することはない。逆に真の「コスモポリタニズム」は、多様な文化、相違を生かし、活性化しつつ創造への原動力となるのである。

その意味で、『法華経』は、「コスモポリタニズム」に満ちあふれた経典である。

『法華経』の「不軽品」には、印象深い一人のある人物の姿が描かれている。「常不軽菩薩」と名づけられたその人物は、人ごとに誰に対しても、礼拝しほめたたえて、次のようにいうのである。

「私は深くあなた方を敬います。けっして軽んじたり、軽蔑したりはしません。なぜなら、あなた方は、みな菩薩の修行を行えば、必ず仏になるからです。」

ここに、すべての差異を超えた一人のコスモポリタンがいる。この人は、相手の立場がどうであろうと、それを差別せず、しかも、すべての人に「仏の可能性」があると説くのである。

多様性を消滅させることのない統一性——今、もっとも必要とされているものがここにある。それゆえ『法華経』は多様な東アジア文化圏において、もっとも流布し、民衆にもっとも人気のある経典となった。それも宗教の領域にとどまるものではなく、たとえば『源氏物語』など、東アジアの文化・芸術作品が絢爛と花咲く土壌となったのである。

他者、異者と出会う、その時にけっして差別の心、軽蔑の心をもたないこと——真の他者としての出会いが「不軽品」に示されている。

思えば、近代国家の成立以来、人類はどれほど「他者」との真の出会いに失敗してきたことか。「自他」の間に区別を設け、「他者」を「浄化」してきた悲劇の道をけっしてたどってはならない。

『法華経』「不軽品」のコスモポリタンの前途には艱難の山、辛苦の谷が待ちかまえていた。絶対的非暴力の彼に対しては、さまざまな「肉体的暴力」、「言論の暴力」が浴びせられた。大きな勢力をもつ人々は、彼の話を聞こうとはしなかった。

この「コスモポリタンの敵対者」は『法華経』の他の箇所でも、こう表現されている。

「自ら真実の道を行じていると思い、人間を軽んじ賤しめるもの」(「勸持

品」)。

コスモポリタンは一切衆生を「尊極の宝」と見、「人間を尊敬する」のである。しかし、敵対する者は「人間を軽賤する」のである。またこの敵対者は「利養に執着する」(同品)とも表現されている。自らの利益のために、他者を軽蔑し、利用するのである。もし現在進行するグローバリズムが、単一の文化や経済の仕組みのみが、「正義」、「真実」であり、自らの権益のためには、他者を「不正」、「虚偽」と排除したりするものに堕してしまうならば、それは全くバランスを失ったものとなってしまふであろう。この『法華経』の言葉は、それに対する「戒め」ととることもできよう。

また『法華経』の「薬草喻品」には「三草二木」という有名な譬喩がある。

植物が生い茂っている世界があった。大きな草、中ぐらいの草、小さな草、大きな樹木、小さな樹木が生い茂っていた。厚い雲が空いっぱいになり、あまねく世界を覆い、雨を降らす。植物の種類は違っても、雨は平等に降り注ぐ。同じように降り注ぐからといって、植物はみな同じものになるのではない。それぞれの性質にしたがって、異なった花を咲かせ、異なった実を結ぶ。

「衆生の多様性」と「仏の慈悲の平等性」が、樹木と雨という美しい文学的表現を伴って、つづられている。

「衆生に差異がない」のではない。「仏が衆生を差別しない」のである。むしろ仏は、衆生の違い、「個性」を尊重し、一切の偏愛や嫌悪を超えて、その個性を生かしてゆくのである。

仏教の「慈悲」と「智慧」こそが、さまざまな異なった文化、価値観、宗教間に「対話」の橋をかけることができるのではないだろうか。

「薬草喻品」にはこうある。

「私（仏）はつねに、すべてのものを平等に観る。彼と此れとを差別する心や、愛憎の心などもなく、偏執なく、隔てなく、つねにすべてのもののために法を説く。それは、まさに一人のために説くように、多くの人々に説く。」

初期仏典の「慈悲の経」には次のようにある。

「147 目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

148 何びとも他人を欺いてはならない。たとどこにあっても他人を軽んじ

てはならない。悩まそうとして怒りの想いをいだいて互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。

149 あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）ところを起すべし」（中村元訳『ブッダのことば』岩波文庫37-38頁）。

仏の慈悲は「慈悲の経」や『法華経』の「不軽品」、「薬草喻品」にあるように、一切の対立、区別を超えて、すべてに開かれている。単に目に見えるものだけではなく、見えないものに対しても、一切の衆生を“我が子”として慈悲は及ぶのである。

それは大いなる「想起の力」であり、常に、自らと異なる他者を視野に入れようとする「精神の力」である。しかも、「薬草喻品」に「まさに一人のために説くように、多くの人々に説く」とあったように、具体的に苦悩する一人の人を救おうとするところから「慈悲」は出発するのである。目の前に、人が倒れていたならば、宗教の相違、人種の相違、育ってきた文化の相違を考えるであろうか。眼前の一人の人を救うという、圧倒的なリアリティから、「慈悲」は出発するのである。

個々の人間の苦悩には、さまざまな文化的、社会的背景がある。『法華経』は、このリアルな現実から一步も離れずに、すべての人々の成仏への道を示そうとするのである。そこに具体的な「人類愛」への大道が開けてくるのである。経王といわれる『法華経』は、「薬草喻品」の慈雨のごとく、アジアの地に寛容と慈悲の雨を降らせ、多様な文化の華がその地を開いてきた。新たな世紀には、その多様性を育む教えが、世界を潤すことを強く望みたい。

私は、1972年、ケンブリッジ大学を訪問し、東洋学部長マイケル・ローウィ博士らの出迎えを受け、東洋学部のレセプションで懇談したことを、懐かしく思いおこしている。続いて、近くのユニバーシティー・アームズ・ホテルで会食し、「ケンブリッジの伝統」、大学教育のあり方、宗教と教育、学問のあり方について意見を交換した。

また、1991年の訪英の折りには、同大学名誉教授の天文学者サー・フレッド・ホイル、ウェールズ大学教授のウィックラマシンゲ博士と宇宙と生命をめぐって対談した。

800年の伝統を誇り、一貫して「学問の王国」の頂点に立ち続けてきたケンブリ

ッジ大学の図書館が所蔵する法華経写本「写真版」の出版は、私どもが取り組む法華経写本シリーズ出版の学術的価値を決定的に高めることになるかと確信している。最後に、本出版にご協力いただいたD・J・ホール副館長、クレイグ・ジェイミスン氏をはじめケンブリッジ大学図書館の関係者の皆様に心から感謝申し上げます次第である。

2002年1月26日

（いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長）

（本稿は、2002年3月26日に出版された『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華経写本（Add. 1682およびAdd. 1683）写真版』の「発刊の辞」を転載したものです。）